



いまい たかし

神奈川県出身。東京大学大学院 博士課程単位取得退学。博士(文学)。著書に『源氏物語 表現の論理』(笠間書院 2008 年)、『大学生のための文学トレーニング古典編』(三省堂 2013 年)

文学部教授
今井 上

平安時代の 文化と源氏物語



源氏物語と私

私は、源氏物語を中心に、平安朝の文学について研究をしています。日本人にとって、春になるたびに心待ちにされるのは桜の花ですが、花と言えば桜のことを指すようになったのは、平安時代からのことです。現在でも私たちが日常使っている、仮名文字が発明されたのも平安時代。この時代には、日本ならではのものの考え方や美意識が成熟し、現代に生きる私たちのルーツと言ってよいような文化の基盤が確立しました。

なかでも、この時代の成熟しきった文化が生み出した傑作として、今なお輝きを失うことがないのが源氏物語です。全 54 巻、400 字詰め原稿用紙に換算すると 2500 枚前後、500 名ほどの人物が登場するとされる、世界に誇る大河小説に他なりません。井原西鶴『好色一代男』が源氏物語を踏まえてかれ、また村上春樹『海辺のカフカ』に源氏物語の「生霊」や紫式部の話が出てくるように、源氏物語は、それがかけられてから 1000 年間にわたって、日本人に読み続けられてきた小説です。『百人一首』を選んだとされる鎌倉時代の名歌人藤原定家も、『徒然草』を書いた兼好法師も、皆この物語の愛読者でした。

西欧社会にもアーサーウェイリーの訳によってい

ちはやく紹介され (1925 年)、小説としての完成度は人々を驚かせました。自分たちよりおよそ千年も前に、極東アジアの島国の、たった一人の女性、レディムラサキが、かくも本格的な小説を書きおせていたとは！

丹念な心理描写と、際立つ人物描写。日本固有の四季折々の風物と、和歌的伝統に支えられた格調高い文章。複雑な人間関係と緊密なプロット。周到な伏線を幾重にもこらした、構成美。そして、読む人が、このあと彼らはどうなるんだろうと、胸を躍らせずにはいられない、上質のエンターテインメント性。源氏物語の世界に分け入れば、私たちの誰しものが、そうした、この物語固有の魅力にすぐに気づきますが、それらに、彼らも圧倒されたのです。今日では 20 カ国語以上の言語に翻訳され、世界の人を魅了しつづけています。それを日本人が読んでないのだとしたら、実にもったいない！それが私の、この物語の魅力をもっと多くの人に伝えたいと思う、その基本にあります。研究の根本にあるものと言ってもよいでしょう。



源氏物語によって世界が広がる

少し話が変わりますが、平成 29 年は、育友会支

部懇談会で、岐阜、三重にお邪魔しました。どちらの地でも、関係者の皆さんがあたたかく迎えてくださり、私の話に熱心に耳を傾けてくださいましたが、なかでも印象深かったのは、三重県支部の方々が、宣長記念館に案内くださったことです。本居宣長は、1730年に、伊勢松坂に生を受け、医業の傍ら、日本の古典の研究に大きな仕事を残した人ですが、彼もまた、この物語の魅力に骨の髄からとりつかれた人物に他なりません。この物語を織りなす、江戸時代の人々にはややわかりにくくなってしまった平安時代の言葉を、どのように理解したらよいかを、彼は『源氏物語玉の小櫛』という書物にまとめます。この書は、今でも、私たち専門の研究者に参照されているものです。校友会の鈴木さん、阪さんのお導きで、新造なった宣長記念館の吉田悦之館長にもお引き合わせいただき、詳しい解説とともに企画展示を堪能いたしました。こんなふうに、源氏物語は世界を広げてくれます。この物語をよく知っていると能をはじめとした古典芸能の世界や、絵画の世界もぐっと身近になりますよ。



源氏物語を研究する・たのしむ

さて、そのように長い時間——今日から見れば千年間——にわたって、読み継がれてきた源氏物語ですが、その素晴らしいことはなんとなく理解できるけれども、その研究というと、いったいどんな仕事をしているのだろうと不審に思われる方も、読者の中にはいらっしゃるだろうと思います。源氏物語の専門家とは、この巻のどこそこの場面が素晴らしい、あの一節の文章がとりわけ美しい、そのようなことを日々考え、授業でも、公開講座でも、学生や社会人に向けて、かようなことを飽きもせず語っている人種なのだろうか？なんともものきな仕事があったものだ、と、あきれる方もいらっしゃるかもしれません。そうした想像も、全く的外れではありませんが、一方でそれだけでは、専門の研究者だと威張ってはられません。

源氏物語という文学作品は、世界にたった一つしかない、そう思われている方はいませんか。それはきわめて現代的な考え方です。なにせ源氏物語が生まれたのは、印刷技術などがなかった時代のことです。多くの人に愛され、誰もが読みたいと願ってきた源氏物語は、数え切れないほどたくさんの人々の手を経、彼らによって書き写されることで、今日まで伝えられてきました。本を読みたければ、写すし



↑「源氏物語湖月抄」宣長も、この本で源氏を読んだ

かないのが、この時代です。というより、日本の歴史を振り返ってみれば、平安時代に限らず、鎌倉、南北朝、室町、戦国と、印刷技術がなかった時代の方が、長かったわけです。

人間はコピー機ではありません。どんなに完璧に見える人でも、この長大な物語を写してゆく際に、つい写し間違いをしたり、何行か文章を飛ばしてしまうといったことがつきものです。するとどういうことが起きるでしょう。

現在に伝わる、源氏物語の写本は800点ぐらいはあるのではないとも言われていますが、その本の一つ一つが、みんなそれぞれに違っている。言葉が違う、文章が違う——表現が違うということは、その文章が意味する内容まで変わってきてしまう。人が手で写したものですから、同じものはその中に一つとしてないのです。それらのうち、どれが信頼に足る本で、どれがそうでないのか、源氏物語の世界を織りなす約38万語とも言われる言葉の一つ一つを丁寧に吟味し、平安時代の言葉遣いとしてこれはおかしい、こちらこそ紫式部の書いた源氏物語原本にあった言葉だろう、そうしたことを総合的に判断し、よりよい本文はこれですよ、そしてこの文章はこのような意味です、とって、一般の読書人に提供する、そうしたきわめてこまかで、気の遠くなるような仕事も、専門家である以上、私たち平安時代の文学の研究者の、地味な、しかしとても大切な仕事です。

しかしながら、学生の皆さんや一般の読書人には、そうしたうるさいことは忘れて、まずは現代語訳でもいいから、ぜひ源氏物語の深さ、美しさ、ストーリーの面白さを、十分に堪能していただきたいと思っています。この文章を読まれて源氏物語を読みたいと思った、でもどこから手を出せば…と思われた方もいらっしゃるかもしれません。そうした方に、手にとってもらえる入門書の編集を、現在、仲間たちと進めています。予定通りにいけば、今年の秋頃には皆さんに手にとっていただけるだろうと思っています。